二〇二二年度入学試験　B－

京都先端科学大学附属中学校

国語

注意

○　問題は全部で十三ページあります。

○　「試験開始」の合図があるまで問題を開いてはいけません。

○　解答は、すべて解答用紙に記入してください。

○　質問がある場合は、静かに手をあげ、教員が来るのを待ってください。

○　「試験終了」の合図があったらすみやかに解答をやめ、以後は教員の指示にしたがってください。

一　次の1～5のことわざや慣用句の反対の意味になるものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1　後は野となれ山となれ
2　案ずるより産(うむ)が易(やす)し
3　好きこそものの上手なれ
4　善は急げ
5　一石二鳥

ア　あぶはち取らず　　イ　急がば回れ　　ウ　下手の横好き
エ　石橋をたたいて渡(わた)る　　オ　立つ鳥後を濁(にご)さず

二　次の1～5の――部の意味としてふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1　あの話は本当なのか、いぶかしいものだ。
2　このままでは優勝はおぼつかないだろう。
3　文章がつたないのでうまく伝わらない。
4　今はただ運命に身をゆだねるだけだ。
5　犯人の居場所をほのめかす。

ア　へたな　　イ　それとなく示す　　ウ　疑わしい
エ　まかせる　　オ　うまくいきそうにない

三　次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

最近、私は知人の会社員からある相談を受けました。「給料だけでは生活するお金が足りなくて困っているんです。子どもの学業にはお金がかかるし、妻からはいい車に乗り換えたいのにお金がないじゃないのと散々文句をいわれていまして……」。そんなことを延々と語るのです。

しかし、そんなことをいわれても、どうにもアドバイスのしようがない。彼の給料は、けっして悪くはありません。「給料の範囲でやるしかないだろう。それができないなら給料のもっといいところを探して転職するしかないよ」といっても、「それはできません」の［A］です。

奥さんも含めて身の丈に合った生活をすればいい話なのに、それができないというのは、自分たちの「分」というものがわかっていないからでしょう。

果たしてこの相談内容を読んで、皆さんはどう感じられるでしょうか。何で[1]こんなことで悩んでいるんだろう、そう思われる方も少なくないはずです。

しかし、このようなことを問題にして悩むという例は、実はけっこうあるように思います。私があえてここに書いたのも、彼には悪いけれど、そもそも[2]問題にする必要のないことを問題化してくよくよ悩み、時間を浪費する、そんな典型例だなと感じたからです。

悩むに値しないようなことを問題にする。深刻になる必要がないのに、深刻になる。傍から見ればどこかおかしいと感じますが、当人にはそれがまったく見えていない。そうならないためには、客観的に自分がどういう状態にあるかを冷静に見て、その上でどうすればいいかを考えるしかありません。それができれば、問題化する手前で、とどまれるはずです。

このようにとるに足りないことで悩んでしまう人がいる一方で、誰がどう見てもやっかいな問題であることを自分一人で抱え込み、深刻に悩んでいるケースがあります。

なぜそこまで深刻になってしまうのかといえば、単にその人に問題を解決する力が備わっていないからです。ところが、当の本人は解決が難しいとわかりながらも、自分の責任で何とかしなくて

はと思っていたり、あるいは自分に解決する力がないのにそのことが認識できず、どこかに正解があるのではないかと悪戦苦闘していることが少なくありません。

問題にぶつかったとき、人はどうすれば解決するか、どこに進めば抜け道が見つかるか、まずは論理的に考えようとします。論理を組み立てていって解決への道筋が見つかればいいのですが、どうも見つかりそうにない。そんなときは組み立てたものを崩して、もう一度組み立て直す。

そんな[1]サギョウを何度やってもどうにもならないとき、その問題は、その[3]人の器をはるかに超えているということです。

このときに大事なのは、自分には問題を解決する力がないことをはっきり自覚することです。自覚ができれば、次にすべきことは問題の事柄についてよく知っている人、経験して助言を与えてくれそうな人のところに行って意見を聞くことです。

これはこう動けばいいとか、実はこんな事実があるからそこを[2]ヒロっていけばいいとか、的確なアドバイスやヒントを授けてくれるかもしれません。もちろんそれでも解決には結びつかないこともあるでしょうが、長い目で見れば何らかの役に立つはずです。

行き詰まったら力のある人に相談に行けというのは、当たり前すぎるアドバイスと思われるかもしれません。しかし現実には、それができない人が多いのです。

そのことを、ぜひ頭に入れておいてほしいと思います。

私はいいことも悪いことも何でも忘れっぽい性質なのですが、これは大事だなと思うことだけは、けっこうちゃんと覚えています。

それは重要だと感じることを、私がいろいろな形でアウトプットしているからなのかもしれません。人と会って話す、講演会で喋る、ノートにつける、本や雑誌の原稿を書く。頭の中から忘れてはいけないと思うものを取り出し、*反芻することで、脳みそに刻まれているのだと考えています。

このように人間の脳は情報をインプットばかりしていてはダメで、アウトプットも同時に行うことによって記憶を定着させるのです。

アウトプットには、記憶の定着率を高める効果があるだけではありません。アウトプットの仕方を工夫すれば、頭の中にある情報や知識、あるいは考えといったものを整理してくれる効果もあります。

*伊藤忠時代、幹部役員の多くは何かある度に、相談役の瀬島龍三さんのところにアドバイスを仰ぎに行っていました。その際、検討資料として持っていったりする事業計画書に対し、瀬島さんはよく「3枚でまとめろ」といわれていました。忙しいから長々と何十枚にも書かれたものなど読んでいる暇がないというわけです。

かといって無理やり3枚にまとめた内容を持っていくと、今度は「何がいいたいのかわからん。要点を3つにして1枚にまとめてみろ」といわれる始末です。

瀬島さんが事業計画書を3枚や1枚にまとめろというのは、自分の時間を[3]セツヤクするためにだけいっていたのではありません。計画書をつくる人がポイントを要約することで、何が大事で何が必要でないかがわかる。つまり頭が整理されるのです。計画を実行に移して仕事を進めるときに、ちらかった頭では無駄も多く、ことによっては失敗も招きかねません。

計画書を長々と10枚も20枚も書くのは、[4]自己満足にすぎない。事業計画を立てるスタートの段階で頭がちゃんと整理されていないと、その計画はうまくいかない。瀬島さんはそう考えていたのだと思います。

また、仕事で新しいことを構想するときは、考えられることをすべてアウトプットしてみるといいでしょう。

何のために行うのか？　最終の目標は何か？　目標へ進むには何がポイントで何が要らないか？　同業他社と比べてどうか？　相手からはどう見えるか？　何がリスクか？　そうしたことについて箇条書きでいいので、書き出してみる。アウトプットすることで初めて、自分が考え足りない点が見えてくることも多いのです。

本を読むなど、いくら質のよいインプットをたくさん持っていても、アウトプットをしなければ、

知識や思考は整理されないことが多いものです。

一方で、アウトプットによりきれいに整理されていくと、これとあれを組み合わせると面白いものが生まれそうだ、などのアイデアも生まれやすくなるはずです。

人は頭の整理は、頭の中だけで簡単にできると思いがちですが、実際はそうではない。頭の整理にはアウトプットが必要だということを知って実行するだけで、成果に差が出るはずです。ぜひやってみてください。

（丹羽宇一郎『人間の器』）

＊　反芻　…　くりかえし考え味わうこと。

伊藤忠　…　企業名。

問一　〰〰部　1～3のひらがなを漢字に直しなさい。

問二　A　に入ることばとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　見栄っ張り　　イ　一点張り　　ウ　あげあしとり　　エ　命取り

問三　――部　1「こんなこと」とありますが、「こんなこと」が指し示す内容を「～こと。」に続く形で本文中から二十五字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問四　――部　2「問題にする必要のないことを問題化してくよくよ悩み、時間を浪費する」とありますが、その状況をさけるための対応策として筆者が考えていることを簡潔に説明しなさい。

問五　――部　3「人の器」とありますが、筆者はどのようなものがその「器」の大きさを決めると考えていますか。本文中から十字以内でぬき出しなさい。

問六　――部　4「自己満足にすぎない」とありますが、なぜそう考えるのですか。次の文がその理由の説明になるように、文中の（　①　）、（　②　）に対義語をそれぞれ漢字一字で入れて完成させなさい。

事業計画を立てる上で大切なのは、（　①　）の問題ではなく（　②　）の問題であるから。

問七　筆者は「アウトプット」することの利点はどのようなことがあると考えていますか。二つ答えなさい。

四　次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

三歳から十二歳まで暮らしていた団地の思い出は、まったく同じ外見の建物から、知らない人が出たり入ったりする、あの光景に尽きる。団地に住んでいる子供の悪夢は、家に帰るとまったく知らない人たちがいて、「お帰り」「お風呂に入りなさい」「ご飯を食べなさい」と言ったりすることだろう。

じっさい、わたしは一度、とても小さいときに迷子になって他人の家に上がり込み、そこに母や父がいないので*恐慌をきたした経験があった。

理科の教科書に載っていた蟻の巣にどこか似ている団地が、わたしの幼少時の世界観を形成した。蟻の巣めいたその空間から出るのは、これはこれで怖いのである。両親から離れることを意味したし、外の世界は誰に踏みつぶされるかわからないところだというイメージがある。しかし、蟻の巣は蟻の巣で、巣穴の中を*無尽に走る道のどこか一本でも間違えれば、自分の家に帰れなくなる恐ろしい場所のような気がして、怖い。

あまりの怖さに、わたしは幼稚園を一日で退園してしまい、小学校に上がるまでは、家族といっしょでなければ、ほとんど外に出なかった。わたしの子守として、田舎から高齢の祖母がよばれた。父は六人兄弟の六番目で、父の母である祖母は長男といっしょに暮していたが、共働きという当時はあまり見かけない夫婦の形態を選んだ末っ子のために、七十幾つの重い腰を上げて、団地の３ＬＤＫに移り住んだ。

明治生まれの祖母は、台所の脇の四畳半に居室を構え、夜も私といっしょに寝てくれた。祖母の話は、桃太郎やかぐや姫、一寸法師といった[1]テイバンの他に、「為せば成る為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」と言って*藩政の立て直しをした米沢藩の藩主・上杉鷹山の母が、鷹山が子どものころに、破れた障子に切り貼りをしてみせて[2]倹約の大切さを教えたのだとか、仁徳天皇が民のかまどから煙が上がるのを見てたいそう喜んだとかいった、わたしと同世代の子どもたちはあまり知らないような話が多かった。しかし、祖母が現役で子育てをしていた時代には、どの家庭でも語られたような昔話だったのだろう。わたしは祖母とのそうした時間を、それなりに楽しんだし、彼女をことのほか好きだった。

朝早く、夫と娘のわたしにはパンと目玉焼き、自分と*姑のためにみそ汁と焼き魚の朝食を調えると、母は祖母に遠慮がちに頭を下げて、[3]いつも本当にすみませんと、必ずそう言ってから出かけた。母は自転車で三十分ほどのところにある病院で看護婦をしていた。父は、母より少し早く、やはり自転車で出かけるのだが、駅の自転車置き場にそれを置いて、私鉄で通勤していた。じゃ、行ってきますと、父のセリフはたいした感情も込められない、やや[2]キカイ的な印象のものだった。

戦争中は、*隣組でいちばん勇壮な竹槍遣いであったという、体も心も丈夫な祖母は、午前中にわたしと幼児番組を見尽すとすっかり飽きてしまい、自分のためにお茶を、わたしには湯冷ましを湯呑に入れて、母の作り置きした弁当を広げる。

「食べてすぐ寝ると牛になるけんどな」

と、食後に昼寝する祖母は、必ず言った。

しかし、食べると眠くなるのも事実で、わたしと祖母は仲良く*午睡を楽しむのだった。

「体がなまるから、出かけるか」

昼寝から醒めると、これまた母が用意しておいたおやつを食べながら、祖母は言う。そうしてわたしたちは、散歩に出るのだった。

祖母といっしょなら、どこへ行くのも平気だった。団地を蟻の巣に例えるならば祖母は女王蟻。というわけでは必ずしもなかったが、そんなことはどうでもよく思われた。腰に手をあてて、ゆっくり歩く祖母と小学校就学前のわたしの歩幅は、ほかの誰よりも相性がよかった。

「食べてすぐ寝たけど牛になんなかったね」

隣や後ろを飛んだり跳ねたりしながら歩くわたしに、祖母は目を細めて言った。

「わっかんねえぞぉ。ひとさまから見りゃあ、おれたちゃあ、はあ、牛になってるかしんねえぞぉ」

祖母の言葉は田舎の方言だった。

「はあ」というのが、なかなか習得しにくく、調子のよさを作るために入れる擬音のようなものかと思っていたが、これにもこれで意味があるようで、のちのち調べたところによると、「はあ」というのは「はや」が訛ったもので、「もう」とか「すでに」といった意味があるらしい。

本人たちが気づかないだけで、「はあ」牛になっている祖母と孫娘。[A]と近所を散歩して歩くのだった。

「年ってものをとりゃなあ」

夜寝て朝になればね、というような口調で、祖母は言った。

「みんな、どうしたって死ぬんだで」
牛だって人だっておんなじことだ。もうすぐ、ばあちゃんにもお迎えが来るんだで。
彼女がどうして毎日そんなことを話してくれたのか、いまから考えると不思議に思う。
祖母は自分に死期が近いことを知っていたのか。それこそ年を取ると必然的に死が近くなってくるので、ふだんからそのことばかり考えていたのか。
いまと違ってあのころには、終活などという妙な言葉もなかったし、死んでからのちに遺族に残すための遺言のようなものは、金持ちの爺さんの死に際に用意されるものというイメージしかなかった。
だいいち、祖母がわたしに毎日言っていたのは、財産の何をどう分けろという話でもなければ、自分が死んだら兄弟孫ひ孫仲良く生きていきなさいという、道徳的な話題でもなかった。ただ、祖母は、まだ、この世に生を享けて四年とか五年とかいった、人間としてスタート地点に立ってまもない孫に、ひたすら死について話し続けたのである。
「死ぬってことはなあ、いろんな人がいろんなことを言ってるけんど、おれは、どうかなあと思ってんだ。偉えような人が言ってるこたあ、みんな、眉に唾つけて聞いてら」
ぶらんこに揺られながら、祖母は言うのだった。
祖母はぶらんこが好きだった。団地の公園には、座面が赤に塗られたのと、青に塗られたのと、二つのぶらんこが下がった遊具が置いてあって、座面が地面に近い位置にある赤いぶらんこにわたしを乗せると、祖母は両足を斜めに開いて踏ん張る姿勢を取り、背中を力強く押してくれた。押すのに疲れると、
「最後だぞ」
と宣言して、一ぺんだけ非常に勢いよく背中を押す。わたしは宙に舞い上がって、お腹のところがきゅーんと収縮するような、くすぐったいような感覚を持つ。
そのときに、怖がって足をつけてしまったりしないで、地面に近いところでぐっとお尻を落とし

て足を上げると、ぶらんこはまた高く高く上がり、わたしはしばらくの間、宙でゆらゆらしていられるのだった。

そうなると、祖母は隣の青い座面のぶらんこに座って、タタタタッと後ずさりをしてから、ぱっと両足を上げる。祖母のぶらんこが宙に浮く。

白い髪を無造作にお団子にまとめ、藍色の*アッパッパを着て下駄を履いた祖母が、風に乗ってスイングする姿がいまも思い浮かぶ。祖母は下駄をうっかり飛ばさないように、足の親指と人差し指でしっかり鼻緒を挟んで、ぐいぐいと力強くぶらんこを漕ぐのだった。小さい子どもが近づいてきて、乗りたそうなそぶりを見せても、気ままに宙を行ったり来たりするその時間を満喫しきるまでは、おいそれと人に譲ってやったりしなかった。

「[4]長いことないんだから、好きにさせてもらうべえ」

祖母はそう言って、*悠然とぶらんこを漕いだ。

「[5]おれはなあ、死んだらそれっきりだと思ってる」

わたしと祖母は、交互に宙に舞い上がった。祖母は独り言にも、わたしに聞かせるための言葉にも思える、とつとつとした語りで、死について語った。

「三途の川だの地獄の閻魔様だの、まるで信じてねえわけでもねえが、心臓が止まって、棺桶に入って、火ん中にくべられてしまうのによお」

サンズノカワや、ジゴクノエンマサマについての知識がなかったので、わたしはまずそこから問いただすことになった。祖母は、仁徳天皇と民のかまどについて話してくれたのと同じように面白おかしく、そして熱心にジゴクノエンマサマを語った。語っているときは、話上手の祖母なりに演出を凝らし、*微に入り細をうがち、まるで見てきたように語ってくれるのに、最後の最後には、

「だけんどもよ。見て帰ってきた者がいるわけじゃなし、おれは、どうかなあと思ってんだ。ちぃっと、眉唾じゃねえかなーと思ってら」

今度はマユツバがわからなくて、わたしは祖母にまた問いただす[3]羽目になる。

こうして祖母とわたしの会話は、ありったけ脱線(だっせん)し、それなりにわたしのボキャブラリを増やしながら、最後は、

「おれは、死んだらそれっきりだと思ってる」

で、終わるのだった。

なぜ、そうした死生観を祖母が持つに至ったかはわからない。

おそらく、彼女が生きてきた中で、自ら学んだ何かだったのだろう。

「死んだら、ぱっと、電気が消えるみてえに、生きてたときのことがみんな消えるんじゃねえかなと、おれは思ってんだ。そりゃあ、おれが棺桶に入るときゃー、草履(ぞうり)を履かされて杖(つえ)も持たされて、三途の川の渡し賃だって持って行くだろうが、世の中にゃあ、棺桶なんぞに入らないであの世に行く人もおおぜいいるからな」

ここで、わたしは、三途の川には懸衣翁と奪衣婆の夫婦がいて、三途の川の渡し賃を持たないものの着物を奪衣婆が剥(は)ぐのだとか、親より先に死んだ子どもは川を渡れなくて、賽の河原で石を積みながら親を待つんだとかいう話を聞かされた。そして、その話が終わると祖母は、

「だけどまあ、おれは、そういうのは全部、眉唾だと思ってんだ」

と、最後に付け加えるのだった。

（中島京子『樽とタタン』）

＊ 恐慌 … おそれあわてること。 無尽 … つきないさま。はてしないさま。

藩政 … 江戸時代の藩主が行った政治のこと。

姑 … 夫の母のこと。本文中の「祖母」のこと。

隣組 … 第二次世界大戦中に国が作った国民を管理するための地域組織。

午睡 … 昼寝のこと。

アッパッパ … 大正から昭和にかけて流行したワンピースのこと。

悠然　…　ゆったりと落ち着いているさま。
微に入り細をうがち　…　細かいことまで注意深く気にして

問一　〰部　1～3のひらがなは漢字に直し、漢字には読みを記しなさい。

問二　――部　1「ほとんど外に出なかった」とありますが、その理由を二つ答えなさい。

問三　――部　2「倹約」とありますが、その意味を表す例文としてふさわしくないものを選び、記号で答えなさい。

ア　いつもなら捨ててしまうにんじんの葉を炒めて、ふりかけにして食べた。
イ　昨日の湯船にためたお風呂の湯を、洗濯するために洗濯機で再利用した。
ウ　自分の大好きなお菓子を、誰にもあげずにこっそり隠して大事に食べた。
エ　短くなりすぎて持てなくなった鉛筆にキャップをつけて最後まで使った。

問四　――部　3「いつも本当にすみません」とありますが、なぜ母はそう言って出かけるのですか。簡潔に説明しなさい。

問五　A　に入るのにふさわしい言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア　かっぽかっぽ　　イ　のっそりのっそり　　ウ　とぼとぼ　　エ　すたすた

問六　――部　4「長いことないんだから、好きにさせてもらうべえ」とありますが、そういった祖母の気持ちとしてふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　そんなに長時間乗り続けるわけではないのだから、少しぐらいのわがままを言うことを許してほしい気持ち。

イ　自分の命がそんなに長くないと感じる年齢になってきたことから、自分の好きなようにふるまいたい気持ち。

ウ　若いときに乗ってから長い間乗っていなかったブランコを、年齢を気にせずに心ゆくまで楽しみたい気持ち。

エ　わたしの子守という大役のストレスから少しでも解放されたくて、少しでもブランコに長く乗りたい気持ち。

問七　――部　5「おれはなあ、死んだらそれっきりだと思ってる」とありますが、なぜそのように考えているのですか。簡潔に説明しなさい。

〈問題はこれで終わりです〉

二〇二二年度　京都先端科学大学附属中学校　B日程〔B1〕　入学試験　国語　解答用紙

受験番号

学校名　小学校

氏名

一

1

2

3

4

5

二

1

2

3

4

5

三

問一

1

2

3

問二

問三

問四

問五

問六

①

②

問七

四

問一

1

2

3

問二

問三

問四

問五

問六

問七

〇

〇

点線より下には何も記入しないこと。
《成績集計欄》

B1

国　語Ｂ１

一【計１０点】

１　オ　２　エ　３　ウ　４　イ　５　ア

二【計１０点】

１　ウ　２　オ　３　ア　４　エ　５　イ

三【計４１点】

問一　１　作業　２　拾　３　節約　（２点×３）

問二　イ　（４点）

問三　給料だけで　～　困っている（こと。）　（５点）

問四　客観的に自分がどういう状態にあるかを冷静に見て、
その上でどうすればいいかを考えること。　（６点）

問五　問題を解決する力　（４点）

問六　①　量　②　質　（３点×２）

問七　記憶の定着率を上げること。
自分の知識や思考を整理すること。
整理されたアイデアを組み合わせてより面白いものが
生まれること。
（三つのうちから二つ答える）　（５点×２）

四【計３９点】

問一　１　定番　２　機械　３　はめ　（２点×３）

問二　団地の他の人の家に入って怖い思いをしたから。
団地で迷い自分の家にたどり着けなかったから。　（４点×２）

問三　ウ　（４点）

問四　姑である祖母に娘の世話を任せることに気が引けたから。（６点）

問五　イ　（４点）

問六　イ　（５点）

問七　死んだら生きていたときのことが全て消えてしまい、
その後のことは誰にもわからないから。　（６点）